

## 八正道考

令和三年五月七日期に記す 大中臣正比呂

正しさとは何か。

筆者の叔父の名前が偶々「正道」であったことから、仏教で言う八つの正しい道、即ち、追求し、達成すべき目標である、「八正道」という修行項目をフト、想起したのである。

「八つもあるのか」と、やや多めだなど、諸兄は思っかも知れないが、考えてみれば、この八つの実践項目は、なかなか素晴らしいものである。結論から言えば、「正見」から入って「正定」に至る仏道修行プラクティスの道筋を云う。日々の反省でもあり、一生の修行でもある。

「定」とは霊界との交流を云い、宗教の本義である。それは仏教だけの本義ではなく、全ての正しい宗教の本義であると思う。その意味では

神仏は「導一」であり、宗教は同根であると筆者は思う。「一」であるからこそ、多様性を認めないことには「一」にはならない。即ち、必ず多様性が有ることを意味する。全て同じ個性の人間はいないのと同じである。

【正見】とは、最初の「正見」とは、正しくもろことを観察したか、ということである。或いは、その力を持つということであるから、偏見なく、そのものの本質や実態を観察したかと云うことである。



【正思】その観察を終ると、次には自分への反応として思考が始まるのだから、「正思」となる。正しく考えたか、正しく思ったかと云うことである。

【正語】正しく思うのであれば、そのチェック方法として言葉に出してみれば判ると云うのである。その通り。だから「正語」である。思っただけ、と云うのであれば他者に影響を及ぼすということはずいぶん、その「正思」をしても修行の意味は少ない。だから、行動を促すのである。最初の行動は、言葉にしてみることである。正しい言葉を出したか、あるいは、出せるのかどうかというチェックをするわけである。

【正業】次のチェック段階は、言葉だけではなく、実際の行動としてどうか、となる。だから「正業」とは、正しい行いをしたかをチェックする。このアクションは単純、単一のものではなく、連続性や行為の広がりがあり、影響を生むわけであるから、正しい営み、即ち、正しい生活を送ったかどうかという、現実世界における活動全般のチェックをするわけである。無論、家庭生活を含むものである。この活動の全体は、かなり広範囲であるから、先ずは、自分の今の生活を省みることから始めるのであり、「正業」は個人的な行いを軸にしている。個人の行いは不正だが、公的な行い、社会的な行いだけは正しいというのはいない。



【正命】しかし、である。それら個人の行動は、先に述べた通り、他者、社会への影響を及ぼしてゆくわけであるから、次には、そこまで考えて、正しい自分の役目を果たしているのかというチェックをする。即ち、行動全体を自身の使命として考える。そのことによつて、使命の上下や大小はあるにせよ、今生きて、命を頂いている者として、正しく使命を果たしているのかという「正命」のチェックをする訳である。

【正精進】この使命のチェックが終わる頃には、事実上、神仏と思われる世界との交流が始まる。神仏の世界を、個人としては全体を把握して認識することは出来ない。出来るのなら、そのこと自体、この人自身が神仏であるのであり得ない。しかし、その部分認識は出来ると云うのが仏教の教えである。然るに、その認識力向上を追求することを「正精進」という。

精進とは、個人的な行為としては、もはや無理というか、範囲を超える。超えていなければ、「独りよがり」ということになり、宗教の本義としての意味は無い。だから、この段階では必ず指導があると云うことになる。誰が指導をするのか。それが霊的存在である。その助けなくば、精進など出来はしない。精進とは勤めであり、努力である。エネルギーが要るのである。その補給は霊界から頂くのである。

この表現として、古来「光明」と言う言葉が仏教で使われることが多い。



お寺に「光明寺」や「妙光寺」とか言う「光」の名前がある道理である。さて、「光」という概念を表すところの霊的エネルギーによつて「精進」は継続できるのであるが、その霊的エネルギーを、今日使用している言葉で表現することは、なかなか難しい。言葉がないのである。そのことが、「霊界」と一般に言うところの世界を「オドロドロしい」あるいは、「オカルト」など、本当のことではない」とか、「あり得ない世界」とか云ってしまう。要は、人間が言葉、単語などの表現を持っていないだけである。やはり、表現する言葉の開発はしないといけないと筆者は思う。

だからと云つて、霊界や霊は存在しない訳ではなく、現実には「有る」。よつて、正精進は、精進者、即ち修行者が、この現実を知っているが、体得している者しか進めない段階である。それまでは「信じて」進むしかない。それも、正しい行為を継続的に探求するのであるから、「正精進」は本当なら上級修行者の域である。

【正念】「正精進」が保たれている段階では、更に霊界の上位の世界との交流が始まるという。霊界にも階層があるということなのである。全ては「一」なる頂点のみではなく、階層性を有するというのが、仏教あるいは宗教の教えである。筆者は、「多神から一神に帰す構造がある」というのが本当であろうと思う。

日本には八百万神が居られる神道の世界があるが、それでも尚、天地創造の神、根源の神という認識があるのであるから、「一に帰する」という、ピラミッド頂点の認識自体は必然としてある。無論、人智を超えた世界であり、その時代の言葉によつて想像し洞察することは出来ても、直接には根本神、根本仏という存在は、人間が認知できるものではない。「導一」に至る過程では、人間には認識できる頂点が見えただけであり、その時代の考えによつて、かろうじて認め得る推定の根本仏が神仏の頂点であるとしが言えない。それは「自由」によつて認識の拡大が期待できるのであるが、このことは別稿に譲ろう。

この頂点から下方階層における神仏、あるいは諸神靈との交流が始まる段階が「正精進」という段階であると先に述べた。この継続の先、あるいはその時々於いて、霊界との交流で実践してゆくのが、「本格的な祈り」である。この祈りとは、個人の祈りが、神仏が計画されておられる内容と一致または合致していることが求められるのであり、その行為である修行の有り様を「正念」という。神仏の意思を探求して、かくあれと念じ、祈るのであるから、霊界交流そのものである。

【正定】この念じ、祈る内容もまたチェックが入る。「定に入る」とは、霊界交流を「瞑想状態に入つて行つ」とする有り様のことである。人は、何かガサガサと動いている時には霊界交流は出来ない仕組みになっている。逆にガサガサしていない時に出来るのである。余談として云えば、一つは夢を



見る世界がそうである。この世界は人間の思考存在がバラレル・ワールドに居ることを意味する。興味深い世界であるので何れ探求してみたいものである。

さて、最後は、瞑想状態を保持している状況で最終チェックがかかるのが「正定」である。要するに「この瞑想状態そのものが正しいかどうか」を問われるのである。結局、あなたの心が何処を向いているのか、あるいは、どの階層の霊界に通じているのかというチェックです。エーツという感じではあろう。神仏の世界に階層があると云え、少なくとも神仏の意思に沿っている世界とのコネクトなのかをチェックすることに

なる。で、そのコネクトが正しい場合、どうなるかが、恐らく諸兄の最大の関心事でしょう。

「正精進」の段階から「光が入る」のであるが、正念、正定にまで達すれば、その「光」、即ち、霊的エネルギーが強くなるという事が容易に想像できるのであろう。正精進、正念を脱することは、自身の行為を脱することでもあるので、正定は、自身の内部とともに、外部からの助けが本格的になされる段階であるとも言える。この結果として、自身の人格は明るくなると思われる。

諸兄も実践を願いたい。そう期待するのが本来の「明るい光に包まれる」光明思想というのではなからうか。

了

